

『山月記』あらすじ

李徴はかつて秀才と称えられ、自分の才能に誇りを持っていました。しかし、他人に認められないことを恐れるあまり、官職を捨てて詩作に専念します。けれども生活は苦しくなり、やむを得ず再び官職に就きますが、その道も長くは続きませんでした。自尊心と現実の間で悩み抜いた末、彼は行方知れずとなってしまいます。

それから数年後、李徴の旧友・袁慄(えんさん)が旅の途中で虎に遭遇します。驚くことに、その虎は人の言葉を話し、自分が李徴であることを告げます。李徴は、自分の傲慢さと臆病さが原因で虎になったことを嘆き、詩作への未練を語ります。そして、袁慄に自作の詩を託し、「私の骨を拾い、詩を伝えてほしい」と最後の言葉を残すと、山の奥へと姿を消していきました。

この作品は、人間の心に潜む「自尊心」と「臆病さ」のせめぎ合いを象徴的に描いています。李徴は才能を誇りにしながらも、それを磨く努力を怠り、他人の評価を気にしすぎた結果、孤独に陥ってしまいました。そして、最後には人間であることさえ失い、虎へと変わってしまうのです。

中島敦の略歴と主な作品

中島敦(1909年～1942年)は、東京で生まれ、幼少期は父の赴任先である台湾で過ごしました。東京帝国大学で中国文学を学び、卒業後は教師として働きます。本格的に文学活動を始めたのは30歳を過ぎてからでしたが、短い創作期間の中で多くの名作を残しました。肺結核を患い、33歳という若さで亡くなりましたが、その文学的評価は死後に高まり、現在では日本近代文学の重要な作家とされています。

主な作品

- 『山月記』(1942年)ー 才能と自尊心に翻弄され、虎に変わってしまった男の悲劇を描く。
- 『李陵』(1942年)ー 匈奴に降伏した漢の将軍・李陵の生涯を通じて、忠誠と個人の尊厳について問いかける。
- 『弟子』(1942年)孔子と弟子たちの関係を通じて、理想と現実の葛藤を描く。
- 『名人伝』(1942年)ー 剣の道を極めようとする男の姿を通じ、修行の本質を問う寓話的作品。

彼の作品は、中国古典を題材にしながらも、人間の普遍的な心理や生き方を鋭く描いていることが特徴です。この4作品は中島敦が亡くなった42年に書かれています。名人伝は亡くなった12月に書かれています。彼は何を残したかったのでしょうか？